

「土佐家粉本、総点数四百七十点、評価額一万七千円。」これが昭和28年4月25日付けで松井佳一氏より申出のあった寄贈の内容である。

昭和28年といえば京都市立美術専門学校が京都市立美術大学に昇格して三年を過ぎたばかり、初代学長長崎太郎が任期を続ける頃である。この申出に対し当時の京都市長高山義三は5月7日その受け入れを認めている。

これらの記録は、寄贈最終段階の手續に作成された事務文書による。従って、寄贈に関わる実質的な作業は大学側において、これ以前に進められ完了していた事になる。手續きの必要性から同年大学図書館において「土佐家粉本目録」が作成された。これは謄写版によるB5判22頁の簡単な目録で、内容は資料名に通し番号をつけただけのものである。前出の総点数はこの目録の数字による。

寄贈者松井佳一氏は水産学者である。明治26年に山口県に生まれ、水産動物の遺伝学的研究や水産養殖の分野に多くの業績をなした。職歴としては京都大学理学部講師などを経て日本合同真珠株式会社日本真珠研究所の所長を勤めており、昭和51年に亡くなっている。名が示すとおり松井氏は土佐家の人ではない。では自然科学の学者がなぜ土佐派の粉本を所蔵していたのかということだが、松井氏はまた趣味の人でもあり、自身「欣魚洞」の雅号を持っていた。聞くところでは、土佐派の末裔である土佐光輝氏がその転居に際し、家に伝わる粉本を処分しようとしたところ、その散逸を惜しみ松井氏が一括購入したものである。光輝氏と松井氏の関係は定かではないが、この出会いは大学にとっても学界にとっても幸運なことであった。松井氏と知遇のあった長崎学長が、大学への寄贈を勧めたのがことの発端である。

こうして本学に所蔵されることになった「土佐家粉本」は現在では文書を含む内容の多様さから「土佐派絵画資料」と名付けられている。収蔵番号は3001番、一括資料として扱っている。

収蔵されて三十七年が経過した。学内では資料全点の写真撮影を終え、裏打ちによる補修作業も徐々に進めている。しかし資料を公共の財産として公開するまで整理がゆきとどかず、研究者への閲覧もままならぬ状態である。そのため、纏まった形で資料紹介する機会を得られないまま今日に至った。資料を保管する大学にとってこれは久しく大きな悩みであった。

しかし近年論文等によって学外にもその価値が注目され始め、学内では閲覧に供せない資料をどのようにすれば公開できるのかという苛立ちも生まれ始めた。

その意味で、今回大学の百十周年記念事業の一環として、資料を初めて一般公開し（「土佐派肖像粉本－将軍・茶匠・町衆」平成2年7月1日～22日、於京都市四条ギャラリー）、図録を刊行したことの意義は大きい。我々編集者としても、この刊行を足がかりにして、同様の図録を継続出版し、「土佐派絵画資料」の全貌を紹介する努力を続けたい。資料の閲覧については、現在もなお諸般の事情により研究者諸氏の期待に応えられない状況にある。資料の価値を認識すればこそ我々にもジレンマがあるのだが、展覧会の機会を増やし、目録を発行することで暫くはご容赦願いたい。

今回の図録制作はその刊行決定が遅れ、調査研究の準備期間が十分にとれないまま編集作業に入った。そのため内容に万全を尽くすことが出来なかったうえ、校正の時間が足りず、編集に関わった者自身必ずしも満足のいく仕上がりとはなっていない。この「とさえ」を発行する理由もそこにあり、目録の脱漏、補遺、正誤訂正を初めとして、資料に関する新知見等が明らかになり次第報告するつもりである。また、本資料に関するご教示に限らず、土佐派の絵画全般についての新知見は我々も望むところであり、読者諸氏には編集者宛て遠慮なくお寄せいただきたい。

だいそれたことかもしれないが、「目録」とこの「とさえ」を軸として土佐派絵画研究のネットワークのようなものが生まれることを望んでやまない。

（松尾芳樹）